

令和5年度

北海道教育大学

附属函館幼稚園だより

NO. 7【号】



絵本と非認知能力

附属函館幼稚園園長 外崎紅馬

コロナが5類に移行したことをうけ、過日実施したゆき組のお泊り保育も実際に園に宿泊して行うのは4年ぶりとなった。翌2日目の朝は私も絵本の読み聞かせを行った。園児に読み聞かせをすることはこれまでもあるが、その時はお迎えのためにお遊戯室に参集した保護者の方々もあり、私にとって緊張の時間となった。

読み聞かせに用いたのは『へろへろおじさん』（佐々木マキ、福音館）という絵本である。内容は、あるおじさんが手紙をポストに投函するため出かけるが、その道中でいろいろな災難に遭遇し、文字通りへろへろになるというものである。手紙をポストに入れても災難は終わらず、おじさんはその不運にとうとうこらえきれなくなるが、親切に手を差し伸べてくれた女の子がおり・・・という話である。

この絵本の読み聞かせをするにあたり、事前に私の研究室に所属する学生にこの物語についての意見や感想を聞いた。感想の多くは、「いろいろな災難に見舞われて落ち込んでいる人には、親切にすることが大切だ」というものだった。物語の9割はおじさんの不運が描かれており、後半の女の子の親切な行為におじさんのみならず読者の気持ちも救われるため、そのような感想になるのもうなずける。

しかし、もっと注目されているのは、親切を受けたおじさんが最後のページできちんと感謝の気持ちを伝えているということである。おそらく、人から受けた親切にお礼をする、感謝の気持ちを示すということは当たり前すぎるため、学生はより積極的で利他的な行動である「親切にする」という行為に感想の重点を置いたのだろう。

社会では親切を受けてもその恩を仇で返す人がまれにいる。そういう人は普段の言動にも問題があるため、周囲の人から疎まれ距離を置かれることが多い。そのような状況はそもそもその人自身の言動に原因があるにも関わらず、それに対して無自覚ゆえに反省もできないため、距離を置かれたことを「仲間外れにされた」と見当違いをし、周囲のせいにしてはばからない。心理学の応用分野ではこれを「認知の錯誤」といっている。

そういう大人にならないように、本園では日々の幼児教育に努めている。質の高い教育というのはなにも学力を高めるということばかりではない。知識があっても常識がないということにならないよう、当たり前の常識や良識を兼ね備えた人づくりこそが教育の本質であり、果たすべき本務である。

